



## CONTENTS

●年次報告書の刊行にあたって	3
■定例研究会	
「生殖の当事者とは誰か——生殖補助医療技術がもたらした男性性の変容」	6
■上映会	
舞台映像「幸福な職場」上映会・講演会	10
映画「カランコエの花」特別上映会・トークイベント	15
■学生向けイベント	
同意ワークショップ「お互いを尊重する「性」のコミュニケーションってなんだろう？」	20
■学生企画イベント	
LGBTs & ALLY 交流会	24
■他機関との連携・協力	
共催「SOGI は今？～歴史と国際からみる今後～」	28
共催「Brexit and Britain, European Human Rights Law」	29
共催 アカデミックフェス 2018「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」	30
後援「名古屋 LGBT 成人式」	31
国際交流事業「第 5 回ジェンダーフォーラム」	32
■研究プロジェクト	
A「現代日本のメディアにおけるジェンダー表象と性規範の形成」	34
B「少女雑誌の変遷に関する実証的研究」	35
C「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」	36
D「現代フランスと日本のメディア言説によって構築された規範としてのカップル像の自己 ／相互表象」	37
■業績一覧・2018 年度	
ジェンダーセンター運営委員業績一覧	40
●ジェンダーセンター運営委員一覧	42
●ジェンダーセンター運営委員会会議録	43
●編集後記	44





## 年次報告書の刊行にあたって

2018年度の情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの活動をご報告いたします。本年は定例研究会を1回、映画上映会を2回、学生を対象としたワークショップと学生の企画による交流会を実施いたしました。また、年度末にはタイでの国際交流事業「ジェンダーフォーラム」への参加を予定しており、他にも学外他機関との連携協力行事などの活動成果を挙げることができました。

今期の定例研究会では男性側を主軸としての生殖の主体性を問う新たな視点からの問題提起がなされ、通常よりは男性の参加者が多かったようにも見受けられました。

映画上映会ではまず知的障害者の就業をテーマとした作品を取りあげましたが、これは昨年度から本センターが扱う3つの領域の一つとして「ダイバーシティ」を提示したことにより採用したもので、障害者雇用の先鞭をつけた一企業の実例に取材したものでした。ちょうど時期的に公的機関が障害者雇用率を水増ししていたことがニュースとなった直後でもあり、障害者問題、中でも知的障害者の存在は大学という知の集団ではとかく見えにくいものとなっているため、広くそうした問題提起をして実態を理解していく上では有効であったかと思えます。

もう一つの映画はLGBTの当事者とその周囲の若者のかかわり方を扱ったもので、現実にまわりにいる多様な人々とどのようにして共に生きていくのかを考えさせる上で、若い世代の人々に訴えかけるものでした。他にもテーマとしてLGBTを扱ったものが複数あり、大学主体のシンポジウムのほかは学生向けのものや学生が企画したものが2件ありました。ここ数年、学生相談室との連携による事業もいくつか実施しておりますが、そうした機関でもLGBTや発達障害者の問題が近年大きくクローズアップされており、今後とも相互に連携協力してできることが多々あるかと思えます。

3月にはタイで第5回目の国際研究交流行事（ジェンダーフォーラム）が予定されており、本センターからも2名が参加いたします。タイ・インドと明治大学の3大学が中心となった研究交流事業で、今後も継続・進展を図っていききたい重要な行事となっております。次回はいよいよ明治大学情報コミュニケーション学部の開催担当となるはずで、ちょうど本センターの設立10周年とも重なるので、本センターとしては責任を持って開催を実現して可能な限り今後引き継いでいきたいものと考えております。

近年、情報コミュニケーション学部や研究科入学を志願する者の中にジェンダーに関心を持つ者も少なからずあり、その遠因には本センターの活動もかかわっているのではないかと推測しております。従来不問に付されていた問題を可視化することで、領域を越えて、多様な生き方も認め合い次代につなげられるような提言の出来る組織として気を引き締めて活動を続けていけますよう、鋭意努力してまいりたいと考えております。支えてくださる多くの皆様方のご尽力に対して深く御礼申し上げます。

2019年3月5日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長  
細野はるみ





# 定例研究会



## 生殖の当事者とは誰か

### ——生殖補助医療技術がもたらした男性性の変容

#### 【講演者】 齋藤圭介氏（岡山大学文学部准教授）

【略歴】 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授。専門は社会学。生殖の問題をジェンダーの視点（とくに男性の立場）から研究している。現在は生殖補助医療技術を用いた夫婦へのインタビュー調査を進めている。主な著書・論文に「〈生殖と男性〉の社会学——ジェンダー理論における平等論・再考」（博士論文）などがある。

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2019年1月16日（水）18:00～（開場 17:30）

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール

【コーディネーター・司会】 出口 剛司氏

（ジェンダーセンター学外運営委員、東京大学准教授）

【来場者数】 26名

#### 報告：出口 剛司（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）

今回の定例研究会では、齋藤圭介氏を講師としてお招きし、「男性が妊娠の当事者になるとき——男性不妊専門医と出生前診断に関心がある男性の語りから」というテーマでご講演いただいた。齋藤氏は、東京大学大学院を修了後、現在、岡山大学文学部で准教授をつとめる新進気鋭の社会学者である。氏の専門領域は、いわゆる男性学である。この領域は、1960年代以降登場した女性学のインパクトを受け、これまで自明視されてきた社会の中の「男性性」の在り方やその問題点を反省的にとらえ直すことを目的としている。女性学同様、脱領域的・学際的に発展してきた知の新領域ともいえるだろう。その中でも、齋藤氏は日本における第二世代を代表する研究者で





あり、今回のご講演でも自らの博士論文と最近の経験的研究を踏まえた、最先端の成果をご披露いただけることになった。氏は本研究会において、これまで不在＝不問のままであった「妊娠における当事者としての男性（性）」に光を当てるが、この「男性（性）の不在」こそ、男性学がもっともその重要性を発揮するテーマであり、同時にジェンダー研究全体にとっても見過ごすことのできない主題を形成しているといえるだろう。以下、当日の齋藤氏のご講演内容



発表者の齋藤氏とコーディネーターの出口氏

を振り返りつつ、そのジェンダー研究に対して持つ意味について振り返っておきたい。

齋藤氏の最初の注目点は、フェミニズムにおける規範理論（ケア論）と現代リベラリズム（正義の理論）の対立にある。フェミニズムが伝統的な人文科学、社会科学を男性中心の学問として批判の狼煙をあげて以来、正義の理論としての現代リベラリズムは、フェミニズムとどのように対峙するのか。これは男性学、ジェンダー研究のみならず、現代思想の根幹を考える上でも重要な問題提起である。ここでフェミニズムが提起した問題とはすなわち、以下の疑念である。現代リベラリズムは、その解放の領域が私的領域とは切り離される形で成立した公的領域（政治・労働・職業）に限定される限り、個人の自由と男女の平等という首尾一貫した規範的主張を展開しうる。しかし、身体的差異が顕在化する私的領域（家庭・恋愛・生殖）においては、自らの主張の整合性を維持することが容易ではないというものである。氏によれば、こうした疑念、整合性のなさがもっとも顕著に表れるのが生殖という私的領域である。じっさいに現実的に「生殖は女性の問題である」「他人事」「よくわからない」「関心がない」という声に隠れて、生殖における男性は不在でありつづけた。さらに生殖という領域に男性が積極的に関わろうとすると、一方で女性の自己決定を侵害したり、パターンリズムに陥る危険性があり、他方で妻を支えるという男性（夫）の姿勢は、時として無関心、消極性という振る舞いの温床となる。その意味で、生殖をめぐる男性と女性の関わり方は、つねに論理的に対立する矛盾状況を引き起こし続けてきた。ここに現代リベラリズムの不可能性があり、齋藤氏の研究はこの「不可能性」に対する挑戦と位置付けることもできるだろう。その中で齋藤氏は、「男性は傍観者」であり「男性の生殖論は議論の空白状態」であったとする現実、そしてそれを上書きする先行研究を乗り越え、何よりもまず「当事者」としての男性の生殖経験を記述することの重要性を強調する。

男性の生殖経験が社会的に顕在化する背景として、生殖補助医療の発達及び晩婚化、晩産化することにより、そうした補助医療に対する社会的関心が高まったことがあげられる。そ



れ以前は、不妊は女性の問題として対処されてきたが、医療技術の進歩によって不妊の原因の50%が男性にあることが明らかとなり、男性が不妊という問題を自らの問題として引き受けざるを得ない状況が生じた。しかし齋藤氏によると、こうした状況下で男性の不妊がスティグマとして扱われる諸側面、つまり、身体が正常でないことへのショック、ライフコースへの影響、他者からのまなざしの変化、所属集団・グループにおける自身の位置づけの変化などがこれまで論じられてきたが、「生殖の当事者として男性は自身をいかに捉えているのか」という視点は欠落してきたという。

まず、齋藤氏による専門医への調査からは、生殖についての男女の意識の格差が依然として存在するものの、不妊治療に関して不妊に対する男性の意識に変化が見られる点が明らかにされる。それがもっとも顕著に表れるのが、初診から男性が来院する点に見られる。さらに、妻が主導するとはいえ、男性の積極的な関与も見られるようになった。その背景にあるのは、自己との関係において、不妊を通して男性が当事者として責任の意識を強く意識づけられるようになったこと、そしてまた、妻との関係においては、妻の負担を分かち合い、軽減したいという意識が存在することが指摘される。不妊治療は多くの場合、女性の身体に対し侵襲的で苦痛を伴うが、夫である男性も同様の負担が生じる検査を受けることで負担を分かち合い、という意識が強く働いていると考えられるのである。ただ興味深い点は、生殖補助医療の発展やそれを取り巻く社会状況の変化の中で、男性の当事者としての意識が形成されつつあるものの、そうした当事者意識は、妻が妊娠するとともに薄れていく事実である。齋藤氏はその原因を、男性意識の変化が父親役割が制度化された「社会的役割」に強く規定されていることにあると見る。

今回の齋藤氏の講演により、近年、生殖医療技術の進歩により、不妊を通して男性の生殖に対する関わり方に変化が生じつつあること、具体的には不妊の原因の可能性をもつ主体としての「身体の自己管理の意識」や生殖そのものにかかわる「主体としての意識」が見られるようになったことがあげられる。しかしその「意識」は熱心に取り組む妻、身体的負担を背負う妻に対する責任の意識の表れであるという点では、他者依存的と言えなくもない。しかしこうした一見、消極的に見える意識の背後に齋藤氏は、単なる「無関心」には還元されない男性の側の意識があるという。それは「関心はあれども何もできないという実感」である。そしてそうした「実感」は、分析、評価、告発、解放をめざす学術的な言説から漏れ落ちるものであり、当事者としての男性の言説を丹念に記述することによって、はじめて浮かび上がってくる。身体をめぐるジェンダー研究では、妊娠・出産の当事者としての女性の自己決定権が特権的かつ規範的に重視されてきた経緯がある。そうした視点の重要性はいささかも減じられてはならないが、その背後で不在となってきた妊娠・出産の「当事者としての男性（性）」を浮かび上がらせることもまた、ジェンダー研究においては必要不可欠な作業である。齋藤氏の研究は、「不妊」というほんの一瞬であれ、男性の身体が妊娠の場に登場する瞬間において、当事者としての男性性を見事に描き出した。そしてまたこれこそ、私的領域における男女の関係性を解明するための重要な一歩でもあるのである。



# 上映会



## 舞台映像「幸福な職場」上映会・講演会

### 【講演者】

きたむら けんじ氏（劇団東京フェスティバル）

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【後援】 明治大学学生相談室

【日時】 2018年6月22日（金）17:20～20:20（開場17:00）

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール

【来場者数】 45名

【コーディネーター・司会】 細野はるみ

（明治大学情報コミュニケーション学部教授、同学部ジェンダーセンター長）

### 【プログラム】

- ・舞台映像「幸福な職場」上映  
（作・演出：きたむらけんじ／2017年上演／120分）
- ・きたむらけんじ氏による講演／司会者との対談
- ・質疑応答





### 【映画概説】

高度成長期に向かう昭和 30 年代の日本。東京のある下町の町工場では養護学校の教員からのたつての依頼で知的障害を持つ少女の職業体験を受け入れることになった。経営者や従業員は当初は拒否や戸惑いを示していたものの、やがて彼らの内面には変化がもたらされる。少女の働きやすいように仕事内容を見直すことは一般の従業員の便宜ともなることに気づくなど、彼らの交流は「障害」や「差別」、「働くこと」の意味を問いかけてくる。その後、会社は少女を従業員として採用し、日本の障害者雇用のさきがけとなった。

知的障害者である養護学校の女生徒が町工場で就業体験をすることを通して、障害者の雇用問題を中心に、周囲の差別感情や一般企業での障害者受け入れに対する根強い抵抗、優性保護法による強制不妊手術が通用していた状況、障害当事者の恋愛・結婚問題、障害者の親としての覚悟の問題などが織り込まれ、障害当事者にとっての「働く」ということの意義や生き方を問うている。

昭和 34（1959）年に東京のある町工場に知的障害のある少女が職業体験に行き、当該企業内にささやかな文化の転換をもたらして雇用の道が開かれたことが素材となっている。受け入れた企業は日本理化学工業という、学校で使用されるチョークを作る中小企業の工場で、日本における障害者雇用を手がけた企業の草分けとなり、その後も多くの障害者を雇用している。本作には障害者をめぐる多彩な問題がちりばめられており、障害当事者や彼らを取り巻く状況について考えさせられる。

本作は劇団東京フェスティバルの演劇「幸福な職場」（2009 年初演）が 2017 年 1 月に世田谷パブリックシアターで上演された際の映像記録である。



## 報告：細野 はるみ（情報コミュニケーション学部教授）

ジェンダーセンターでは多様性の理解と共生社会の実現に寄与することを設立以来の目的の一つとしており、約2年前からは「ジェンダー」のほかに「ダイバーシティ」「承認」も加えて3つの項目をキーコンセプトとして掲げている。そうした問題提起をこめた企画として、2016年度には障害者とその周囲の人々を扱ったドキュメンタリー映画「ちづる」の上映会を実施した。今回はそれに次いで、やはり知的障害者を扱った舞台劇「幸福な職場」の映像化作品を通して、障害者をめぐる状況の理解への提言をめざした。

2018年という年には、官公庁での障害者雇用の数値の水増し問題が軒並み表面化したり、旧優生保護法を根拠とした障害者の強制不妊手術の人権侵害問題が当事者たちから提訴されたりした。この作品はこうした問題点を先取りしたものとして、優れて問題提起的であると言える。

1947年に議員立法で法案が出された優生保護法は、第二次世界大戦中の国民優性法が兵員増強を目的としていたのに対し、中絶を認めるなど、女性の産む権利を主眼としていた。しかし、障害者は身の自立が難しい、障害は遺伝である、障害者は障害者を再生産して治安上も問題である、などを根拠として、戦後のベビーブームに対する産児制限の必要もあり、知的のみならず視覚や聴覚の障害者までもが不妊手術を強制された。2018年にはかつて強制的に手術を受けさせられた当事者たちが相次いで人権侵害を告発する訴訟を起こしており、現時点でも注目すべき問題である。

また、現在では「障害者雇用促進法」や「障害者差別解消法」等で障害者の社会参加の促進は謳われてはいるが、現実の理解や施策などにはまだまだ問題が多い。現行法では一定規模以上の事業主には障害者を一定の割合で雇用する義務があり、できない場合は納付金を負担することとされている。官公庁などの雇用率は民間企業よりは高く設定されているが、実際は雇用者の数値が水増しされていたり、不適切な算定をしていたりする実態が次々と明らかにされた。雇用後の便宜上、身体障害者に比べて知的・精神・発達障害者の雇用が大幅に遅れているなどの内実もあるなど、昨今の経済低成長や働き方改革などの陰でゆがめられた実態も少なくない。ジェンダー問題やダイバーシティ問題への提言を標榜するジェンダーセンターでのこの作品の上映会の実施は意義あるものと考えられる。

作品中では、少女の恋心や結婚への夢など、一人の女性として当然抱く内面の思いも描かれ、障害当事者の視点も提示されている。また、誰もが当事者や当事者にかかわる立場になりうるとして、他人事ではなくすべての人に関係する問題としても取り上げられている。障害者の姿はとかく施設や家庭の中に押しとどめられ可視化されず、また社会に出ようとしても常に無力な存在としてしか受け入れられてはこなかった。こうした点にもスポットを当て、これからの障害者観をも問い直そうとしている。



上演後、作者のきたむらけんじ氏にお話を伺った。同氏は放送作家としてラジオのニュース情報番組「JAM THE WORLD」(J-WAVE)などを手掛けるほか、「劇団東京フェスティバル」を主宰している。選挙、震災、米軍基地などといった深刻な社会問題を扱いつつ、人間味あふれ、時にコミカルな部分も織り交ぜて、重要だが避けられがちな問題に知らず知らずのうちに目を向けさせる作品を生み出している。



演出・脚本家のきたむら氏

「幸福な職場」は当初90分ほどの作品だったものを、知的障害者施設で元職員により入居障害者に対し大量の殺人・傷害が行われた2016年の津久井やまゆり園事件をきっかけに、「障害者は社会に対して不幸をしか作らない」という犯人の主張に対して、そのカウンターになるような要素を込めて120分の作品に再構成したという。そこで主人公のさとみの淡い恋心のエピソードが加わった。障害者もまた我々と変わらない一人の人間である、ということを強く気付かせる場面である。また、きたむら氏自身の初めて親になった経験と重ねあわされて、胎児性水俣病のトピックを媒介に、誕生直前のわが子がもし障害児だったらどう受け止めるかという観点を盛り込んで、当事者は決して限定された人々ではないのだというメッセージを明確にしたという。この作品は高校など学校で上演される場合も多く、こうした問題になじみのない若い人々にも無理なく多様性への理解を広げるきっかけになっていよう。

講演の後には会場からの質問や発言も多く、関心の高さがうかがわれた。

### 【「幸福な職場」のあらすじ】

1964年の東京オリンピックを控え、新幹線や高速道路の建設をはじめとして東京は高度経済成長と都市化の波に乗ってきていた。大学を卒業して洋々とした前途を夢見ていた大森は、父の死により学校で使うチョークを製造する町工場の若き経営者となる。そこに地元の養護学校の教員が女子生徒さとみの卒業後の就職先として受け入れてもらえないかと頼みに来た。そうした前例もなく大森は拒否するが、熱意に負けて期間限定での無給の職業体験だけなら、と渋々受け入れる。従業員の久我は何とかラベル貼りの仕事を覚えさせようと努めるが、原田は所詮無理だと否定的である。さとみが毎日一番に出勤して頑張っている様子を見て、大森は少し難しい材料の配合の仕事ができるかどうかテストするが、分銅の目盛の読めないさとみには無理であった。

さとみは従業員の原田に好意を寄せるが、原田が自分の存在を迷惑だと言っていると聞かされてからは出勤しなくなる。大森は教員からそのことを聞き、加えて、知的障害者は養



対談するきたむら氏とコーディネーターの細野氏

護学校卒業後に施設に行くことも多いがそこでは「手術」を施されることもよくある、彼らは概して寿命も短いので長くは迷惑をかける、等とも聞いて、彼らのおかれた状況を次第に理解するようになる。ちょうど来訪した檀家寺の住職の話とも重ね合わせて、人の生きる意味や価値について考え込み、次第にその考え方に変化を起こしてくる。以前さとみの出来なかった仕事内容を彼女にも理解できる形に工夫し修正すると、さとみにもこなせるようになった。

従業員の久我は出産間近の妻について懸念があった。妻は熊本県水俣市の出身、当時は胎児性水俣の存在が社会問題となった頃で、生まれてくる子供が障害を持っていたらどうするかとの問いを自らに突きつけていた。子供は無事生まれたが、この問いは、障害者問題を自らに引き付けて考える契機となった。

職業体験期間が過ぎ、さとみも1ヵ月分の給金を手にすることができ、喜ぶ。

50年後、久我の長男が研究者として大森の工場を訪れ、さとみが現在も現役で働いている姿を見る。大森の工場はその後障害者の雇用を多く受け入れてきていた。

物語の初めと終わりを包むように、時代背景として高度経済成長期に突入していく日本、物はどんどん作って捨てて新たに売るという右肩上がりの時代と、半世紀後、形ばかりは障害者雇用促進法ができ、障害者の人権にも目が向けられるようになった現代との対比が描かれる。

#### 【来場者の感想】

アンケートには参加者45名のうち26名から回答が寄せられた。おおむね好意的で、よい映画だった、ストレートな表現でわかりやすく感動した、あまり関わりたくないテーマを触れやすい形で見ることができた、授業や講演などの形より演劇・映画の形で共感しやすかった、などの声が寄せられた。障害を明るく前向きにとらえていてよかったという声の半面、実際にこのようにうまくいくケースばかりではないと思うが、ではどうすればよいのか考えさせられたという声もあり、問題提起としては有意義であったと考えられる。

ジェンダーセンターのイベントとして、上映会とトークの形は参加のハードルが低くてありがたい、との声もあった。



## 映画「カランコエの花」 特別上映会・トークイベント

### 【登壇者】

中川駿

(本作品監督)

池田えり子

(特定非営利活動法人 ReBit 事務局マネージャー／元高校教員)

松岡宗嗣

(一般社団法人 fair 代表理事)

田中洋美

(明治大学情報コミュニケーション学部准教授)

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
一般社団法人 fair

【後援】 明治大学学生相談室

【日時】 2018年6月27日(水) 19:00~21:00 (開場 18:30)

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール

【来場者数】 100名

【メディア掲載】 「高校舞台 クラスにLGBT そのとき周囲は・・・」『東京新聞』  
2018年7月4日(水)、朝刊、18面。





報告：松岡 宗嗣（一般社団法人 fair）

2018年6月27日、筆者が代表理事を務める一般社団法人 fair と明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの共催で「映画『カラコエの花』特別上映会・トークイベント」を開催した。ある高校2年生のクラスで行われた LGBT に関する授業をきっかけに



左から松岡氏、中川氏、池田氏、田中氏

始まる「LGBT 探し」や、生徒たちのさまざまな葛藤を描いた映画「カラコエの花」を上映。その後、監督の中川駿氏、LGBT の子ども、若者を支援する特定非営利活動法人 ReBit 事務局マネージャーであり、元高校教員の池田えり子氏、情報コミュニケーション学部准教授の田中洋美氏、筆者の4名が登壇し、「周囲にできること」をテーマにパネルディスカッションを行なった。

映画のキャッチコピーは「ただ、あなたを守りたかった」。LGBT に関する社会の認識の変化が過渡期と呼ばれるような現状の中、学校という閉ざされた空間の中で起こりうる高校生のリアルな心の葛藤を、当事者ではなく、周囲の人々の視点から鮮やかに描いた本作。

善意で LGBT について知識を伝えること、悪気なくセクシュアリティを揶揄すること、守ろうと思ひ否定すること、配慮とは、理解とは何か。友人、クラスメイト、家族、先生、さまざまな立場から「今まで見えてこなかった他者とどう向き合うか」を考えさせられる映画だった。

中川監督が本作を制作したのは2年前。LGBT という言葉を耳にして興味を持ったが、どう描こうか考えた際、センシティブなテーマだから、うかつに手を出したら誰かを傷つけてしまうのではと考え、映画仲間に相談した所、自分の中の潜在的な差別意識に気付かされたショックが制作のきっかけだったと語った。

さらに、とあるゲイの当事者のブログを読んだ際、周囲の過剰な配慮に気づいたというのも本作を制作した一つのきっかけだったという。そのゲイの当事者は、自身のセクシュアリティをオープンにしていたが、周囲にカミングアウトした後、周りからはいつも「言ってくれてありがとう、絶対に誰にも言わないからね」と言われたという。

本人の同意なく、第三者にセクシュアリティを暴露する「アウトティング」は、本人のプライバシーの侵害にあたり、生命の危機に及ぶこともある。しかし、本人の意思を確認せず、勝手な決めつけで腫れ物扱いをすることでしんどさを感じる当事者もいる。監督は、そうし





た他者の画一的な「配慮」によって、当事者や周囲の人々が混乱する様子を描写したいと考えたという。



池田氏は、高校教員時代、生徒たちに自身がバイセクシュアルであることをカミングアウトすることはできず、性の多様性について教えることもできなかったという。LGBTについても伝えることができればと思って学校に飛び込んだが、そのハードルは非常に高かったと語る。

当事者として過ごした自身の高校時代を振り返ると、当時の先生から「女の子らしくしなさい」「将来はお父さん・お母さんとこんな家庭を築きます」という教育を繰り返してきてきたことで、先生に対してセクシュアリティについて打ち明けることは難しかったと語った。

田中氏は、自身が受け持つジェンダー論の授業で、LGBTだけでなく、社会に共存している自分と異なる他者と遭遇したときに、どう振る舞えるか、どのようにコミュニケーションをとれるかについて伝えているという。



本作では、養護教諭が、ある1つのクラスだけでLGBTについての簡単な授業を実施することで、クラスに当事者がいるのではないかという憶測が広がっていく様子を描いている。騒動に対する養護教諭の対応も良いものではなく、田中氏は教員として見過ごすことはできないと語った。

特に、学校という場で教員が持つ権力の大きさに言及。例えば、生徒や学生の前で話す際に、セクシュアルマイノリティの人がいるかもしれない。選挙の話をする際に、選挙権を持つことのできない人もいるかもしれないといった想定が必要だと語った。さらに、子どもたちの未来を委ねられ、「知」を伝える教員という立場だからこそ、定期的な新しい情報のインプットの必要性を訴えた。

最後に、田中氏自身も感じていたという学校独特の息苦しさについて触れ、学校という場が子どもたちにとって楽しい場である一方、息苦しい場所にもなりうることに言及。誰もが居心地の良い環境づくりについて語った。

上映後に参加者から映画に対する感想や質問を募集。映画に込められた思いや、LGBTについて学校でどのように教えたなら良いか等、多岐にわたる質問が寄せられた。映画の上映とパネルディスカッションが、無意識の偏見でもなく、過剰な配慮でもない、「自分と異なる他者との向き合い方」について考えるきっかけとなることを願う。





# 学生向けイベント



## 同意ワークショップ

～お互いを尊重する「性」のコミュニケーションってなんだろう？～

【講師】大澤祥子氏

(一般社団法人ちゃぶ台返し女子アクション共同代表)

【略歴】

女性をはじめとするあらゆる人が自分を肯定して生きられる社会を作りたいと思い、2015年にキャンペーン団体「ちゃぶ台返し女子アクション」を立ち上げる。昨年は、明治時代から変わっていなかった刑法性犯罪を改正し、性暴力を取り巻く文化を変えるキャンペーンを実施。現在は性暴力をなくすために、若い世代を中心に性的同意の大切さを広める活動を展開中。前職では NPO・NGO のコンサルティングに従事。

【主催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【後援】明治大学学生相談室

【日時】2019年11月16日(金) 13:30~15:10 (3限)

【会場】明治大学駿河台キャンパス リバティタワー16階 1165教室

【来場者数】27人 (コメントシート回収分)

【コーディネーター】細野はるみ

(明治大学情報コミュニケーション学部教授、同学部ジェンダーセンター長)

主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
後援：明治大学学生相談室

学生のみなさんへ！

### 同意ワークショップ

お互いを尊重する「性」の  
コミュニケーションってなんだろう？

色んなアングル（映画が大学にまだないケースも実施し）+ F・S・Sの学び（同意の倫理観をいかに  
役割について考える）等の参加型ワークを通して、性別関係について知識を深めるワークショップです。

性に関するよくある思い込みの例

- 同意は言葉で  
伝えないと  
伝わらない
- 嫌いな相手と  
同意できる
- 嫌いな相手と  
同意できる  
のは当たり前
- 嫌いな相手と  
同意できる  
のは当たり前
- 嫌いな相手と  
同意できる  
のは当たり前

【日時】2018年11月16日(金) 13:30~15:10 (3限)  
【場所】明治大学駿河台キャンパス リバティタワー16階1165教室  
【持ち物】筆記用具

事前申込制・入場無料

講師：大澤祥子氏

お問い合わせ先：〒113-8501 東京都文京区根津1-1-1 明治大学駿河台キャンパス  
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
TEL: 03-3296-4436 / E-mail: gender@mmeij.ac.jp



報告：細野 はるみ (情報コミュニケーション学部教授)

2017年7月、性犯罪の厳罰化を主眼とした刑法の規定の改正が行われた。現行刑法が明治時代に制定されて以来110年ぶりの改正で、全体的には現代の実態に合わせた進展が目指されている。具体的には、「強姦罪」を「強制性交等罪」と呼称を変え、被害者は男性でも適用されることになり、また刑期の下限を3年から5年と厳しくし、起訴にあたって被害者の告訴がなくても可能となった。さらに、親または子供を保護監督する立場の者がその影響力に乗じてわいせつな行為を行ったりすることも罰せられるようになり、総じて被害者の立場をくんだ改正となった。ただ、議論に挙げられていながら先送りとな



講師の大澤氏

った課題も残されている。例えば、強制性交等罪に「暴行または強迫を用いて」という要件が残ったが、これでは相手に対して恐怖で声をあげられなかったり抵抗できなかったりした場合には犯罪と認められないケースもでてきてしまう。しかし、性犯罪は人間関係の微妙な機微にかかわる場合も多く、本人の自由な意思が奪われたかどうか非常に重要なポイントとなってくるはずである。自由意思が無視された場合は相手をモノ扱いして人格の尊厳を踏みにじったこととなり、暴行や強迫がなくても本人が同意していない場合は強制的な性行為であると言わざるを得まい。相手の意思を尊重するコミュニケーションの取り方がそこでは問われてくる。

「ちゃぶ台返し女子アクション」は同意のない性犯罪の被害をなくすことを目指して学生などの若者を対象に「同意」について考えるワークショップを諸方の大学などで展開しているグループであり、性関係における主体性の重要さに気づかせるためのワークショップの内容は英米の取り組みを参考にして構成されている。この組織の大澤祥子氏を招いて、情報コミュニケーション学「ダイバーシティ・コミュニケーション」(細野担当)の授業時間をベースに、全学生に呼び掛けてワークショップを実施した。同じワークショップは2017年度にも学生相談室の主催で行ったが、その都度、参加した学生からは好評価を得ている。

大澤氏の用意したロールプレイ用のシナリオを事前に朗読担当の学生に示しておき、その朗読の寸劇を最初に演じてから、大澤氏のリードに従ってグループで討論した。事前の朗読希望者を募る際も積極的に手が挙がり、寸劇では真に迫った熱演で大いに盛り上がった。内容は、男女の学生が二人きりの状況で親密な関係に進展するかどうかの場面に、影の声として親や友人や先輩や社会一般の声が加わり、それらの声が輻輳してセリフを述べ合い、チャンスを逃さず親密になろうとする男子学生と躊躇する女子学生の心理劇のような展開である。「その場の雰囲気」で結局拒否できなかった女子学生は不同意ながら性的行為を受け



いれてしまう。その後の嘆きは主として女子学生の側のセリフのみである。朗読者はあえて事前に男女を分けずに逆の性のセリフも担当するので、言ってみて、男性なら・女性ならこんなふうを考えるのか、ということに気づくきっかけともなる。

その後のグループ討論で「同意とは何か」について話し合った後に、さきの寸劇を同意のある形に作り替えるとどうなるかを話し合った。相手の同意を得る際、相手に否応なく従わせる形ではなく、「NO」と言える余地を残した問いかけのあり方が重要であるとの指摘には多くの学生がうなずいていた。「性的同意（セクシャル・コンセント）」という概念が示されたとき、多くの学生が少なからぬ驚きを抱いたようである。ワークショップを通じて、その場の雰囲気にもまれてしまうことに男女とも抵抗できず、男性も自分の「男らしさ」を示すために後に引けないとプレッシャーを感じたり、女性も相手に嫌われることを恐れて抵抗できなかつたり、という展開を文化として受け入れてしまっているのは、実は性における主体性が軽視されていることなのだという気づきがほぼ全員の学生に深く理解されたと思われる。特に、忖度したり空気を読んだりすることを暗に強要されてしまう日本社会の状況、性に関する話題をタブー視したり、性教育も皮相なものにとどまりがちな学校教育など、日本でこの概念が軽視される理由も指摘された。つまるところ性的関係においても結局対等なコミュニケーションが成り立つことが最重要であるとの認識は今後の学生の人生にとって有意義であろう。

性犯罪となると他人事のように感じてしまいがちだが、納得した上での性関係がいかに難しいか、それは相互の人格を尊重しあうコミュニケーションの取り方如何に関わってくるとの指摘、そして最後に、自分だけでなく周囲にもそうした理解を広めて、問題を抱えた人を支援できる主体となることへの啓発もなされてワークショップを閉じた。扱った事柄は身近であり、特に若者にとっては大いに関心のある事象である。ワークショップの方向性も難しくはなく納得しやすいものではあったが、とにかく問題として表面化させにくい。

参加者はおおむね積極的に興味関心を持って臨んでいた。その後の声として、大学の授業で性交渉についてのストレートな話題を扱ったのが新鮮だった、中学高校の段階での性教育



ワークショップの様子

の充実を望む、などがまずあった。また実際に朗読を担当した者からは、影の声（社会通念）に従わないことは難しいと感じた、男子学生として女性側の役を演じてみると女性の気持ちが理解できた、などとあったのはロールプレイの効果が発揮されたというべきだろう。外国人留学生からは、日本語自体のあいまいさ、すなわち「大丈夫」「結構です」などは同意でも不同意でも使えるとの指摘もあった。留学経験者からは、行った先の国の文化と比較しての感想も様々出された。



# 学生企画イベント



## LGBT s & ALLY 交流会

～みんな違ってみんないい～

【主催】LGBTs&ALLY 交流会実行委員会

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】第1回：2018年12月12日（水）17:10～18:50（5限）

第2回：2018年12月19日（水）17:10～18:50（5限）

【会場】明治大学駿河台キャンパス

【主旨】

- ・LGBTs 及び SOGI について実際に話し合い、触れ合う中で知識を増やし、理解を深め、より身近なものとして親しんでもらう
- ・LGBTs 及び SOGI の認知度を上げる
- ・学生同士の一つの交流の場とする
- ・様々な人の意見や考えを聞くことでより多様な価値観を養い、視野を広げる機会を提供する
- ・ありのままにいられることの喜びを味わい、自己肯定へと繋げられる場を提供する

【来場者数】27名

主催：LGBTs & ALLY 交流会実行委員会  
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

学生企画

## LGBTs & ALLY 交流会

日常生活で「もやもやすること」  
について話してみませんか？

日時：第1回：12月12日(水)5限(17:10～18:50)  
第2回：12月19日(水)5限(17:10～18:50)  
※お好きな回をお選びください。(各回同一内容です)  
場所：明治大学駿河台キャンパス  
※お申込みされた方に後日、詳細をお知らせします。  
対象：本学学生  
※ご安心して参加頂けるよう、プライバシーへのご配慮をお願いします。

事前申込制(各回最大12名)・参加無料  
お申し込み締切：11月30日(金)  
お申し込みは右のQRコード、または以下のURL  
からお願いします。  
<https://goo.gl/forms/pYpCBUI8VfvFGGEw2>

【タイムテーブル】  
①説明・アイスブレイク  
②テーマトークA  
③席移動  
④テーマトークB  
⑤フリータイム

お茶・お菓子  
いただきます！！

お問い合わせ：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
Tel: 03-3296-4436 / E-mail: gender@meiji.ac.jp



性の多様性から広がる新しい世界  
—LGBTs&ALLY 交流会を通して—

報 告：八木 勇樹（商学部 3年）

2018年12月12日(水)と12月19日(水)の2日間にわたり駿河台キャンパスで「みんな違ってみんないい」をテーマに「LGBTs&ALLY 交流会」を開催した。参加者は二日間合わせて27人であった。

本企画は学内でセクシュアリティやジェンダーについて話せる場が不足している事やLGBTs当事者やSOGIに関して興味を持つ人にとって直接参加者同士が交流するイベントがまだ無かったため、そういう場を作ってみてはどうだろうかという思いから始まった。さらにその根本には一人で悩んでいる方や前に踏み出したい方に一つでも居場所を提供したいという強い気持ちが私の中にあっただためである。

本交流会ではLGBTs及びSOGIについて実際に話し合い、触れ合う中で知識を増やし、理解を深め、より身近なものとして実感してもらう事を主軸に行えるように努めた。上記の目標を達成すべく、本交流会では主に二つのプログラムを中心に進行していった。一つ目は「テーマトーク」である。これは事前に行ったアンケートを通して参加者の要望を伺い、話すテーマを決め、そのテーマが印字されたカードを適宜見ながら参加者同士が好きなペースで話すことができるといったものである。二つ目は「もやもや共有トーク」で、これは普段もやもやしている事や疑問に思っていること、さらには話してみたいことを参加者が自由に話し合うというもので、ある方が話した事を聞いた他の参加者の方々が感想や意見、アドヴァイスをし、今後の参考にしていくというものである。ここでは参加者に話すことを無理強いせず、他のメンバーのやりとりを聞くだけでもよいことを伝えた。このように本イベントは皆が安心して過ごせる時間であることを大切にしたい。

当日はジェンダーセンターの紹介やルールなどの説明から始まり、アイスブレイクで自己紹介を兼ねたゲームを行った。どのグループも交流会開始前は緊張した面持ちが見受けられたが、アイスブレイクをしていく中で、楽しそうな表情で話す場面やリラックスしている様子が徐々に増えてきた。オープニングの後はテーマトークA、続いてテーマトークBを行った。私はテーマトーク時にグループで話していることを聞きながら、グループの雰囲気や状況を把握するように努めた。また主催者であり参加者でもある立場から彼らを見守るだけではなく、時には会話に加わり参加者と直接触れ合う時間を取るように心掛けた。

第一回目の交流会ではテーマの難易度の高さが語り合いの障壁となる場面が多々見られたが、ぼつりぼつりと話し始める方につられて周りの方も次第に会話に加わるようになり、交流会の終盤には活発に話し合っていたという印象を受けた。第二回目の交流会では第一回目の交流会の反省を活かし、話し合うテーマをより身近なものにし、LGBT当事者だけではなく、ALLYにとっても話しやすいものとなるように工夫をした。その成果もあって、



第二回目の交流会ではテーマトークの序盤から盛り上がっているグループもあって全体を通して和やかな雰囲気が感じられた。さらに第二回目では学生の参加者だけではなく教職員の方にもご参加頂いた。参加者は世代間で異なる価値観や経験を互いに語り合い、新たな気づきや発見を見つけながら楽しんでいただけたようだ。

テーマトークのあとは休憩を挟み、最後に先述した「もやもや共有トーク」を行った。これはテーマトークとは異なり決まったテーマが無いので、開始直後は戸惑い気味の方もいたが、話す内容が自由ということもあり、様々な話題が飛び交った。皆が普段中々聞けないような疑問を問うてみたり、日常生活で困っていることを打ち明けたり、自己の意見を述べたりとそれぞれが思い思いに話していた。

第一回目では何を話せばよいのか分からずに沈黙が続いてしまったグループもあったため、途中で会話に参加していき、グループの緊張を和らげるように話を広げたり、個人の意見を聞いてみたりした。一方、第二回目ではグループを分けずに参加者全員で輪になって話をした。先生方や参加者の多くの方から発言があって、「もやもや」を全員で共有するというまさにこの時間に最適な形式で進行できたように感じられた。その一方で個人間の距離が離れており、少々声が聞き取りにくい場面があり、また参加者全員で話すため、緊張し、少々話しづらいつつも思われた。しかしながら様々な方の意見や考えを共有する場としてうまく機能した事を鑑みれば、本イベントは結果として概ね成功したと言えるのではないだろうか。交流会後に設けたフリータイムでは話しきれなかった事を話しに行ったり、本を読んだりといろいろな過ごし方でそれぞれが楽しんでいただけた。

交流会開催にあたり、アウティング防止やプライバシーの保護のため、いくつかルールを設定した。そのルールは事前に参加者に連絡するだけでなく、交流会当日には紙で配布をするなど最大限の注意を払った。

交流会を終えて浮かび上がってきた今後の課題はまずは参加者を増やすこと、より参加者のニーズに沿ったイベントを行えるようにすること、そして何より事前の準備を早くから行うことである。LGBTs&ALLY 交流会実行委員会は私一人だったということもあり、企画書やチラシの作成から宣伝、当日の運営に至るまで時間に追われる状況に何回も直面し、あまり余裕がない事が多かった。さらに管理や防犯の観点から参加者の対象を限定したことで学外では十分に宣伝が出来なかった。

全体としては参加者がある程度集まり、無事に終えることができたので学内初の交流会としては大盛況だったと思う。本交流会の開催にあたり、学生企画を快く引き受けて下さったジェンダーセンター、とりわけ企画者である筆者を温かく応援して下さいました田中先生、書類提出などでお世話になった事務職員の方々、そしてLGBTs & ALLY 交流会にご参加頂いた皆様に厚く御礼を申し上げます。本交流会のようなイベントを通して誰もが誰ものSOGIを尊重する社会へと少しでも変わっていくこと、そしてジェンダーに関係なく全ての人があるままでいられる世界になっていくことを願ってやまない。



## 他機関との連携・協力



■共催

シンポジウム  
「SOGI は今？～歴史と国際からみる今後～」

主催：LGBT 法連合会

共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

日時：2018年4月30日（祝・月）13:00～17:30

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント グローバルホール、  
アカデミーコモン ビクトリーフロア

報告：田中 洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

近年、国連などの国際政治の場で性の多様性を論じる際に急速に使われるようになった言葉に「SOGI」がある。これは性的指向（sexual orientation）と性自認（gender identity）の頭文字からなる語である。セクシュアルマイノリティの総称として使われている「LGBT」が少数者集団を表すのに対して、「SOGI」は誰もが当事者となるセクシュアリティそのものを指し示す。本シンポでは、大規模イベントとしては初めてタイトルにSOGIを掲げ、この概念の導入の背景や有効性を踏まえ、その上でセクシュアリティに基づく差別や抑圧をなくすための有効策について議論する機会を設けた。

全体会の後は教育、法律、雇用、国際の4分野に分かれて分科会が開催された。本センターは全体会および教育に関する分科会の企画に携わった。同分科会では、本学に加え、津田塾大学、国際基督教大学、早稲田大学の学長・役職者が登壇し、各大学におけるSOGIの現状や取り組みについて話があった。分科会の最後には、本学の土屋恵一郎学長、津田塾大学の高橋裕子学長、国際基督教大学の日比谷潤子学長により「SOGIの多様性に関する学長共同宣言」が発表された。

多くの来場者があり、またメディア取材（「差別禁止の法整備を」『東京新聞』，2018年5月1日，朝刊，16面）も多く、意義深いイベントとなった。





■ 共催

## Brexit and Britain, European Human Rights Law (Brexit とイギリス、そして、ヨーロッパ人権法)

主催：明治大学国際連携本部 英国研究

共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

講師：Professor Robert Wintemute

### 第 1 回

#### The European Convention and Court of Human Rights: A Model for an East Asian Convention and Court of Human Rights?

(ヨーロッパ人権条約とヨーロッパ人権裁判所：東アジアにおける人権条約および人権裁判所のモデルとなるか?)

日時：2018年5月8日(火) 17:10~18:50

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 3階 4031 教室

### 第 2 回

#### LGBTI Human Rights in Europe, the UK and Japan

(ヨーロッパ、イギリスおよび日本における LGBTI の人権)

日時：2018年5月9日(水) 15:20~17:00

会場：明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン 8階 308F 教室

### 第 3 回

#### Freedom of Movement in the European Union: A Model for East Asia Despite “Brexit”?

(EUにおける移動の自由：「Brexit」にもかかわらず東アジアのモデルとなるか?)

日時：2018年5月10日(木) 10:50~12:30

会場：明治大学和泉キャンパス

和泉図書館 1階 和泉図書館ホール

イギリスの大学教員の講義を聴講するチャンス!

明治大学  
MEIJI UNIVERSITY

国際連携本部主催 英国研究イベント  
情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター共催

“Brexit and Britain,  
European Human Rights Law”

講師：  
**Prof. Robert Wintemute**  
Professor of human rights law at King's College London



英国のロンドン大学キングス・カレッジ (KCL) から著名な講師を招聘し、講演を開催します。  
このたび招聘することとなった講師のProf. Robert Wintemuteは、KCLにて教授を務めており、LGBTI、人権差別禁止法等、先進的人権問題について精力的に研究されています。

講師の主な著書

- *Israel-Palestine Through the Lens of Racial Discrimination Law: Is the South African Apartheid Analogy Accurate, and What if the European Convention Applied?* (2017, King's Law Journal)
- *Accommodating Religious Beliefs: Hair, Clothing or Symbols, and Refusals to Serve Others* (2014, Modern Law Review)
- *Confronting homophobia in Europe: social and legal perspectives* (2012, Oxford, Hart Pub.)

※申込不要・入場無料  
お問合せ先：明治大学国際連携事務室 <ico@meiji.ac.jp>  
Language: English Open to public, free of charge  
International Collaboration Office, Meiji University <ico@meiji.ac.jp>



■共催

## アカデミックフェス 2018 「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」

主催：明治大学

共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

日時：2018年11月23日（祝・金）

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階 グローバルホール

### 報告：牛尾奈緒美（明治大学情報コミュニケーション学部教授）

昨年度から恒例となった大学主催の知の祭典、「アカデミックフェス」への参加イベントとして、本企画を考案し、ダイバーシティを企業経営の根幹に位置付けている企業5社のリーダーを招聘し講演と質疑応答で展開するセッションを実施した。大学主催のイベントであり、内容的にジェンダー、LGBTといった人材多様性の問題を扱うものであることから、ジェンダーセンターの共催を要請し、イベントの事前準備や当日の運営支援、広報活動の応援等、多大な協力をいただいた。

近年は人口減少社会のもと、AIやIOTなどの情報化、経済のグローバル化が進展し、ESG、SDGsへの対応やコンプライアンス重視の経営が求められるなど、企業をとりまく環境は大きく変化し、従来型の経営手法、人材管理のあり方では整合性がとれない状況となってきた。そのなか、新たな経営改革の流れとしてダイバーシティ・マネジメントの考え方が注目され、その取り組みを本格的に展開する、第一生命ホールディングス株式会社・第一生命保険株式会社代表取締役会長の渡邊光一郎氏、株式会社丸井グループ代表取締役社長の青井浩氏、株式会社ポーラ代表取締役社長の横手喜一氏、アクセンチュア株式会社相談役（前社長・会長）の程近智氏、株式会社ミライロ代表取締役社長の垣内俊哉氏、5名の経営者を招き、各々50分の講演と20分の質疑応答で構成する連続講演会を行った。

8時間にわたる長丁場であったが、各講演前には学生による企業紹介プレゼンテーション、講演では経営者自身の言葉でダイバーシティ経営に対する思いや考え方が語られた後、筆者のファシリテーションによるQ&Aへと続き、多くのフロアー参加者との活発な意見交換が行われるなか終始熱気あふれるセッションが繰り上げられた。

来場者は500名以上を数え、立ち見が生じ補助席で対応するほどの盛況ぶりであった。参加者は一般客、企業の経営者や人事担当者、学生、政府や自治体関係者、マスコミ関係者など多岐にわたり、事後アンケートの結果からも反響の大きさを確認することができた。





■後援

**2018年度 名古屋 LGBT 成人式**

主催：特定非営利活動法人 ASTA

共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

日時：2019年2月10日（日）13：00～16：00（12：30開場）

場所：名古屋能楽堂会議室



■国際交流事業

第5回ジェンダーフォーラム

主催：シーナカリンウィロート大学（タイ）、  
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

日時：2019年3月19日（火）～3月23日（土） \*本報告作成時点では開催予定

会場：シーナカリンウィロート大学（タイ）

参加者：田中洋美、高馬京子

2013年に始まったシーナカリンウィロート大学（タイ）、クマウン大学（インド）との国際交流事業（通称：ジェンダーフォーラム）の第5回会合をシーナカリンウィロート大学で開催する。今回は同大学で開催される「第12回研究会議」に参加し、「デジタル時代のメディアと情報」と題されたセッションで口頭発表を行う。またシーナカリンウィロート大学に加え、チェンマイ・ラチャパット大学も参加の予定である。シーナカリンウィロート大学の関係機関を表敬訪問するとともに今後の連携のあり方について協議する。



# 研究プロジェクト



## A 「現代日本のメディアにおけるジェンダー表象と性規範の形成」

田中洋美／石田沙織

本プロジェクトは現代日本のメディアにおけるジェンダーイメージおよびジェンダー・セクシュアリティ規範の構築を分析するものである。今年度は雑誌、テレビ等のマスメディアから漫画同人誌、演劇や美術等の芸術作品、動画広告、ソーシャルメディアに至るまで様々な現代メディアのジェンダー問題を検討した。主に表象とオーディエンスの研究を行った。

その結果、主流メディアにおいては今も女性やセクシュアルマイノリティが象徴的に抹消・矮小化される傾向があるが、政府・自治体広報といった公的メディアや女性雑誌といった女性メディアを含む形で広く女性身体性のセクシュアル化が起きていること、またセクシュアルマイノリティの描写が多様化していることがわかった。漫画同人誌に関する調査では、余暇を利用し二次創作活動に従事する女性達——「腐女子」と呼ばれる——の手になる作品およびその基となるオリジナル作品に見られるジェンダー表現・規範の分析に加え、最近増加しているオリジナル作品の「2.5次元舞台」が同人誌コミュニティに与える影響についても調べた。今年度は、今後本格的な調査を行うための予備調査として4名の女性を対象に聞き取り調査を行ない、二次創作同人活動の対象としている作品の舞台化により、原作作品の消費、および創作活動にどのような影響が見られうるのかを尋ねた（2018年7月及び11月実施）。動画広告やソーシャルメディアについては、性差別的な表現が持続していること、しかしながら従来メディアの受け手でしかありえなかった個人が発信できるようになり、ジェンダー視点によるアドボカシーが一定の影響を持つようになったことを検討した（例えば#MeToo等）。新しい言説空間にはリスクもあり、引き続き現状を捉え、そこに見られるチャンスとリスクを見極めることが求められる。今後の課題としたい。



## B 「少女雑誌の変遷に関する実証的研究」

江下雅之／川端有子

明治から大正にかけて続々と創刊された高等女学校生徒向けの雑誌（いわゆる「少女雑誌」）は、当時の女学生たちの娯楽の供給源であった。実業之日本社発行の『少女の友』および大日本雄弁会講談社発行の『少女倶楽部』は、いずれも発行部数が数十万部に達していた。太平洋戦争の激化にともなって多くの雑誌は休刊を余儀なくされたが、『少女の友』および『少女クラブ』（改題）ともに戦争による中断を乗り越えた。しかし、『少女の友』は昭和 30（1955）年に休刊となった。また、『少女クラブ』は昭和 37（1962）年に休刊となり、かわって『週刊少女フレンド』が創刊された。昭和 30 年代は、平凡出版の『平凡』、集英社の『明星』などの娯楽雑誌が部数を拡大させるとともに、講談社の『週刊少年マガジン』、小学館の『週刊少年サンデー』などマンガを多々掲載する雑誌が相次いで創刊されるなど、十代を読者対象とする娯楽雑誌が大きく様変わりした時期でもある。少女雑誌もそのうねりから逃れることはできなかった。

一方、昭和 25（1950）年には月刊誌『女学生の友』が小学館より創刊された。それまで小学館は少女雑誌に分類される雑誌を発行していない。この雑誌もまた、同社が発行する雑誌群のなかでは『中学生の友』（昭和 24 [1949] 年創刊）とおなじく学年誌に位置づけられたようだ。しかし、誌名、判型、構成等の点で同時期の『少女の友』『少女クラブ』との共通点は多く、読者層の点からも、少女雑誌とみなすことは可能だろう。

そして同誌は昭和 52（1977）年 12 月号まで月刊誌として発行を続け（1975 年に誌名を『JOTOMO』に変更）、その翌月から『プチセブン』（創刊後しばらくの間は表紙に『女学生の友』を併記）という週刊誌にリニューアルし、こちらは 2002 年まで発行され続けた。『女学生の友』の変遷は、明治期以来の伝統的な少女雑誌の内容・構成が戦後どのような変化を迫られ、同時に、他の雑誌カテゴリにどのように派生したのかを示しているものと考えられる。このことを通じ、十代の雑誌読者が娯楽誌に求めた需要の構造的変化を捉えることができよう。

こうした問題意識にもとづき、2018 年度は『女学生の友』の主要連載記事、特集記事、読者投稿の整理を進めた。2018 年度終了時点では、芸能情報への関心が 1960 年代後半に映画スターからアイドル歌手（外国のグループを含む）に移りつつあったこと、おしゃれに関する情報がほぼ同時期に増加傾向が顕著になったこと、男女交際への悩みや学校の規則に対する反発など、中学生・高校生の学校に対する不満が頻繁に取りあげられるようになったこと等、1960 年代後半に大きな転換があったとみなせる材料が集まりつつある。2019 年度においては、この点に関する詳細な裏づけ調査を進めたい。

これらの分析結果は、2019 年度前半に中間的な報告を研究会等の場で発表する予定である。



## C 「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」

牛尾奈緒美

政府による「働き方改革」の推進や、女性活躍、障がい者の雇用促進、LGBTの雇用管理上の配慮、正規・非正規社員といった雇用形態による差別的雇用慣行の是正等の観点から、人材の多様性を積極的に高めていこうとする動きは加速している。こうした一連の流れは、多様な人材の能力を最大限に開花させ、属性による差別を排して応分の活躍を促すダイバーシティ・マネジメントの推進と同義であると理解できる。

実際には、法令遵守や時流に乗り遅れないために取り組みを始めたばかりという企業もあれば、かなりの年月をかけて取り組みを深化させ、ダイバーシティの理念のもと組織風土やビジネスモデルを大きく変化させている企業も散見される。

そこで、今年度は、ダイバーシティを企業経営の中核に据え多様な人材価値の結集により業績向上を実現する先進企業 5 社の経営トップを迎えた講演会を企画・実施し、その成果を事例研究として書籍化する計画を立てるとともに、教育的観点から動画教材の製作も行った。研究対象は、第一生命ホールディングス株式会社・第一生命保険株式会社 渡邊光一郎代表取締役会長、株式会社丸井グループ 青井浩代表取締役社長、株式会社ポーラ 横手喜一代表取締役社長、アクセンチュア株式会社 程近智相談役、株式会社ミライロ 垣内俊哉代表取締役社長である。ミライロを除く 4 社では、女性活躍を出発点にダイバーシティに取り組み始め、のちに障がい者、LGBT、外国人等へと対象を拡大させ、今日ではすべての人材に対して個々の多様性に着目した真のダイバーシティ経営へ舵を切ろうとしていることが明らかにされた。一方、社長自らが障がい者であるミライロは、マイノリティ人材の持つ価値こそが経営の強みとなりうる独自のビジネスモデル、「バリアバリュー」に基づく経営方針を掲げ、新たな視点からのコンサルティング業務で成功を収めていることがわかった。



## D 「現代フランスと日本のメディア言説によって構築された 規範としてのカップル像の自己／相互表象」

高馬京子／アメリ・コーベル

今年度は、現代フランスと日本のメディア言説を通して、いかにフランスの「カップル」像が形成されているか、いくつかの事例を通して比較検討を試みた。

まず、日本のメディアにおいてフランス特有のカップル形態として「フランス婚」という形がどのように紹介されているかについて考察した。日本では、「フランス婚」（事実婚の意『実用日本語表現辞典』）といった言葉で語られるほど、日本と異なるフランスの特徴として、女性の自立に基づいた非婚関係の恋愛を重んじる事実婚のカップルというイメージが多いとみられている。実際日本のメディアでも、2017年12月号の『クーリエ・ジャポン』の中でフランスを中心とする「愛のカタチ」特集が組まれたが、そこでは、フランスのカップルの事例として「お手軽『事実婚』、『PACS』で結婚のいいところどりをするフランスのカップル」、「24歳差『禁断の恋』の障壁を超えて仏ファーストレディになった『ブリジット・マクロン物語』」というように、お手軽な事実婚、禁断の恋、といったイメージが強調して選ばれていたり、漫画『じつはウチ、フランス婚 ～結婚してない、でも家族』（しばざき2008）の中でも「なぜフランスではフランス婚が常識なのだろうか」と記されており、その他『結婚という呪いから逃げられる生き方—フランス人女性に学ぶ』（岩本2017）、『フランス人は一割しかお嫁に行かない』（柴田2016）などその他一般の読み物の中でも結婚という形式をとらないフランス人女性をお手本に設定し日本人の結婚観に問を投げかける一般書、メディア記事が多く出版されている傾向がみられた。一方フランスにおいて『Francoscopie2030』によると、2014年の家族構成は、子供がいるいないにかかわらず51.4%がカップル、それ以外は一人親、一人暮らしであった。また、INSEEによると、2016年のPACSは15万組に対し、結婚は25万組と結婚の方が多い。また、フランスの民放テレビ番組のM6で放映される子供がいる80代、50代、30代の夫婦が登場する『Scène de ménages（夫婦喧嘩）』（調査対象期間はフランスで同性婚法が成立した2013年）は、ゴールデンタイムである20時25分から大衆に向けて放映されているが、公式フェイスブックの視聴者コメントをみても、多くが、批判ではなく、登場人物達である夫婦や番組に対して*adorer*（大好きである）という語を用いたり、登場人物の名前を挙げて新年を祝う等友人のようにメッセージを送ったり、また「一番好きな夫婦と共に」「誰と一番似ているか」等がFACEBOOK公式ページでも視聴者向けに投稿され、その夫婦像に友人や視聴者を投影させる鏡のような形で提示している。このように、フランス社会で一般大衆向け「規範的」なカップル像として「夫婦」が提示されている事例もみられる。今回のように日仏のいくつかの事例にみるカップル像のずれからも、誰向けに提示しているかでそのカップル像は異なってくる可能性が示唆された。





# 業績一覧



## ジェンダーセンター運営委員業績一覧（各 50 音順）

### \*\*\*論文\*\*\*

- 牛尾奈緒美, 2019, 「ダイバーシティ経営の推進を加速する動きは、日本企業の競争力強化に有効か」『月刊 企業年金』1-2月号, 企業年金連合会, pp. 32-33.
- 金本麻里・松山真太郎・種市康太郎・川上真史・牛尾奈緒美, 2018, 「コーピングによるストレス反応の改善効果: 2年間のデータを用いた縦断的検討」『第34回産業・組織心理学学会大会発表論文集』, pp. 135-138.
- 高馬京子, 2018, 「越境する GEISHA」松本健太郎・高馬京子編『越境する文化、コンテンツ、想像力』, ナカニシヤ出版.
- Koma, Kyoko, forthcoming, “Construction of kawaii as an Idealized Femininity in the Context of Fashion in Modern Urban Japan”, D. U. Joshi, C. K. Permpoonwiwat, and H. Tanaka, eds., *Gendered Cityscapes: Revisiting Questions of Gender Identity, Equity and Marginalization in Urban Asia*, Jaipur, India/ Dordrecht, The Netherlands: Rawat/Springer.
- 田中洋美, 2018, 「ジェンダーとメディア研究の再構築に向けて」『国際ジェンダー学会誌』16: 33-44.
- Tanaka, Hiromi, and Ishida, Saori, 2018, “The Meaning and Purpose of Doing Manga: The Case of Female Manga Fandom called Fujoshi,” A. Beniwal, R. Jain, and K. Spracklen, eds., *Global Leisure and the Struggles for a Better World*, Basingstoke, Hampshire, U.K.: Palgrave Macmillan, pp. 201-218.
- Tanaka, Hiromi, forthcoming, “The Sexualization of Women and Men in Japanese Urban Media,” D. U. Joshi, C. K. Permpoonwiwat, and H. Tanaka, eds., *Gendered Cityscapes: Revisiting Questions of Gender Identity, Equity and Marginalization in Urban Asia*, Jaipur, India/ Dordrecht, The Netherlands: Rawat/Springer.

### \*\*\*著書\*\*\*

- 松本健太郎・高馬京子編, 2018, 『越境する文化、コンテンツ、想像力』, ナカニシヤ出版.

### \*\*\*コラム・エッセイ・取材記事・講演録等\*\*\*

- 牛尾奈緒美, 2018, 「働き方は3年ごとに見直そう 理想をつかんだ、私たちのターニングポイント 牛尾奈緒美」『プレジデント・ウーマン』, 2018年4月号, pp. 10-11.
- 牛尾奈緒美, 2018, 「トレンド特急便・特別版: 学び直して女性が輝く社会を 牛尾奈緒美副学長に聞く」『サンケイスポーツ』, 2018年5月3日, 19面.
- 牛尾奈緒美, 2018, 「東京からこんにちは: 専業主婦から副学長、企業の社外役員 明治大学 副学長 牛尾奈緒美」, 静岡商工会議所報『SING』, 2018年5月号, p. 23.
- 牛尾奈緒美, 2018, 「女性の活躍が企業を変える: 管理職育成の鍵とダイバーシティを生



かす組織の要件」『岐阜県経済同友会会報』, 2018年1会報 vol. 386, pp. 2-4.

田中洋美, 2019, 「セクシュアリティの多様性を真に受け入れる時代に向けて」『Shall we?』  
(三鷹市企画部企画経営課平和・女性・国際化推進係), 第68号, p. 5.

田中洋美, 2019, 「人生のパターンについて考える——ライフコース研究の視点」, 『TASC  
MONTHLY』(たばこ総合研究センター), 2019年3月号, pp. 6-12.

### \*\*\*学会発表・報告\*\*\*

金本麻里・松山真太郎・種市康太郎・川上真史・牛尾奈緒美, 2018, 「コーピングによるストレス反応の改善効果: 2年間のデータを用いた縦断的検討」, 第34回産業・組織心理学学会大会発表, 於・名古屋大学, 2018年9月2日, 産業組織心理学学会2018年度優秀学会発表賞受賞.

Koma, Kyoko, 2018, “Normative Femininity of Japanese Women and “Kawaii” Constructed through Discourses of Japanese Fashion Magazine *an an* in Comparison with *ELLE France*”, The 22nd Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia, The University of Sydney, Australia, 5 July, 2018.

田中洋美, 2018, 「メディアをめぐる社会変動と新たな研究の必要性」, 国際ジェンダー学会2018年大会(ラウンドテーブルI), 於・聖心女子大学, 2018年9月1日.

Tanaka, Hiromi, 2018, “The Sexualization of Japanese Women in a Global Postfeminist Era,” The 22nd Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia, The University of Sydney, Australia, 5 July, 2018.

### \*\*\*講演\*\*\*

牛尾奈緒美, 2018, 「働き方改革とダイバーシティ・マネジメント」社会政策学会・日本経営学会共催 公開シンポジウム講演「今日の働き方改革を問う」報告2, 於・明治大学, 2018年6月23日.

牛尾奈緒美, 2018, 「企業における女性活躍の推進とワークライフバランス」リバティアーアカデミー『これからの企業経営と働き方改革』, 於・明治大学, 2018年11月14日.

田中洋美, 2018, 「私と身体と社会の関係～身体を考えるって何だろう」, 東京都北区男女共同参画拠点施設スペースゆう『北区さんかく大学』, 2018年9月22日.

Tanaka, Hiromi, and Koma, Kyoko, 2018, Lecture, “Gender Representation and the Portrayals of Women in Japanese Media: A Changing Pattern,” Department of Sociology, National Taipei University, 21 November 2018.

Tanaka, Hiromi, and Koma, Kyoko, 2018, Lecture, “The Portrayals of Women in a Japanese Women’s Life Style Magazine,” Department of Taiwan Culture, Languages and Literature, National Taiwan Normal University, 22 November 2018.



## ジェンダーセンター運営委員一覧

○委員長

細野 はるみ

○副委員長

田中 洋美

○学部内運営委員

牛尾 奈緒美

江下 雅之

施 利平

宮本 真也

高馬 京子

○学部外運営委員

高峰 修（政治経済学部）

○学外運営委員

出口 剛司（東京大学）

川端 有子（日本女子大学）

石田 沙織（プロジェクト共同研究委員）



## ジェンダーセンター運営委員会会議録

第 1 回運営委員会 2018 年 4 月 20 日

第 2 回運営委員会 2018 年 5 月 25 日

第 3 回運営委員会 2018 年 7 月 20 日

第 4 回運営委員会 2018 年 10 月 12 日

第 5 回運営委員会 2018 年 11 月 9 日

第 6 回運営委員会 2019 年 1 月 18 日



## 編集後記

私には苦手なことが一つある。

なんらかの会のさなかで、「ちょっと用事がある」とかいいながら席を立つことである。会議であっても、飲み会であっても。電話がかかってくる、トイレに行きたくなっても。そのせいで恋人にしかられたこともあれば、会に居続けてつまらなかったことを悔やんだこともあった。

しかし、子供ができてから事情は変わった。

私を待っている人がいる。私がいなければダメな人がいる。

そう思うと、「ちょっと用事がある」の言葉も勇気を持って言えるようになった。

昔とちがって大学は変わったけれども、大学こそはもっと変わらなければならないと思う。社会もそう。それを考えるのも、私たちのテーマだと思います。

細野先生、「お疲れさま」とはまだ言いません。

私たちはまだまだここでやっています。お待ちしておりますから。

ジェンダーセンター運営委員 宮本 真也

昨年度の編集後記にてギャップについて触れました。現代社会において、ジェンダーセンターの三つの理念（ジェンダー、ダイバーシティ、承認）に関連した流れにギャップがあること、そのギャップは気づかれることすらないという状況に対し、このジェンダーセンターが契機と発展の場となることを願ったのが一年前。

しかし、新しい環境下での一年で新たに「気づいていても気に留めることがない」状況の根深さを考えさせられました。無関心ではない、でもそこがつつりと時間や気持ちを割く余裕（資源とも言い換えられるでしょうか）がない——誰にでも覚えのあることだと思います。

そのような中で設立準備年から十年の節目を迎えるジェンダーセンターで続けられてきた講演会から映画の上映、今年度試みられた学生によるトークの開催などは、気づいた・気になっていた誰かの目や心に留まるためのフックです。このフックを、今後も柔らかくも鋭く研ぎ、全く知らない人からちょっと気になっている人まで、多くの人に引っ掛けることができるよう取り組み続けたいと思います。

ジェンダーセンター運営委員 石田 沙織



今年度、本センターはジェンダーおよびダイバーシティを軸に映画上映会に始まり、ワークショップや定例研究会、さらには学生が企画した交流会など、計 5 つのイベントを開催した。これらのイベントを通して、“配慮”という問題が浮き彫りになったように思われる。

ジェンダーやダイバーシティの文脈で、一般に心づかいや気づかいと言えば、ALLY から LGBT へ、あるいは健常者から障がい者へといった非当事者から当事者に対し向けられる優しさやあたたかな眼差し、あるいは遠慮やためらいが含まれた言動として理解される。

しかし、イベントの運営やセンターに来訪する学生たちとの対話を重ねていくうちに、誰もがひとびとの関係性のなかで、他者との距離感を見失い、自らのコミュニケーションの在り方を模索する“当事者”であることを実感した。自他ともに傷つく・傷つけることを恐れ、ひととのコミュニケーションが会話を円滑に進めるためだけの単なるテクニックと化したり、その一方で他者と本音で話し、真剣に対峙したとしても、話し方によっては思いがけない亀裂を生むこともある。本センターは情報コミュニケーション学部設置のジェンダーセンターとして、コミュニケーションとは何かを考え続け、人と人との関わりを大切にすることをめざし、引き続き取り組んでいきたい。

最後に、本センターの取り組みに深いご理解とご協力を賜り、あたたかく見守ってくださった本学教職員をはじめ、共催や後援で多々お世話になった公的機関や民間企業の方々、さらにイベントに足を運んでくださった多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

ジェンダーセンター事務局 大久保 美花



## ジェンダーセンター年次報告書 (2018 年度)

- 
- 2019 年 3 月 31 日発行
  - 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター